

論文要旨

氏名 鹿嶋 恵

論文題目

「道順説明」の談話における概念化と相互作用に関する研究

論文要旨

◆本研究の目的

「道順を知っている人がそれを知らない人に説明する」という行為は、日常生活の中で一般的に行われている言語コミュニケーションである。それは、基本的に話し手（説明者）と聞き手（被説明者）の間における相互行為として成り立つものであり、かつそれは、説明者／被説明者が状況をどう解釈したかという認知プロセスが反映される構造を持つ。

本研究では、説明者と被説明者が地図を持ち、説明者が知っている道順を、それを知らない被説明者に対して説明する行為を「道順説明」と呼ぶこととした。

本研究の目的としては、「道順説明」を行う談話において、説明者が概念化していく状況の要素とそれらに関係づける構造を抽出し、それらを説明者・被説明者間で共通のものとして相互構築していく過程の解明を目指した。さらには、トラブルが生じた際に、それを解決していくための談話構造と相互作用の過程を明らかにすることも目指した。すなわち本研究では、「道順説明」という言語コミュニケーションを元に、社会的相互行為の談話分析と認知言語学という2つの領域から、「談話」、「認知」、「相互作用」という3つの問題の交点に迫ることを試みた。

◆本研究の方法

本研究は、談話データの質的な談話分析を基本とする。その談話データは、Blakar (1973) の手法に基づく課題達成実験によって収録した音声および文字化資料であ

る。この実験は「単純な道順(赤)」、「単純な道順(緑)」、「複雑な道順(青)」の3種の説明を1セットとして、2人組の被験者ペアで実施した。

被験者ペアの組み合わせは次の通りで、各10組、合計30組(60名)である。

- ・母語場面 (被験者①・被験者②ともに日本語母語話者同士のペア)
- ・接触場面Ⅰ (被験者①: 非日本語母語話者、被験者②: 日本語母語話者のペア)
- ・接触場面Ⅱ (被験者①: 日本語母語話者、被験者②: 非日本語母語話者のペア)

◆本研究の概要

本論文の内容は、第Ⅰ部から第Ⅲ部までの3部構成となっている。以下、順に概要を述べる。

◇ 第Ⅰ部

第Ⅰ部(第1章～第4章)では、日本語母語話者同士の被験者ペアによる談話場面(「母語場面」)のデータを用いて、主に説明者によって概念化される「道順説明」の状況を検討し、そこで繰り返し概念化される要素とその関係性を明らかにしている。ここでの談話データは、「単純な道順(赤)」と「単純な道順(緑)」を対象とした。

第1章では、先行研究を踏まえ、「道順説明」の談話を構成する要素、およびその関係性を捉える視点をまとめ、これを実際の談話資料において検討した。

Lakoff (1987) の「起点・経路・到達点のスキーマ」の‘structural elements’と Psathas and Kozloff (1976) の「道案内」の‘essential elements’を元に検討した結果、「道順説明」の談話においては、<出発点>、<終着点>、<参照点>、<方向>、<経路>を示す5つの要素が重要であると考えられた。また、これらの構成要素の関係性を捉えるためには、MOVEMENT《移動》および‘operations’《操作》という概念が有効であることも見た。そして<出発点>、<参照点>、<終着点>は、Langacker (1993) の‘reference-point constructions (参照点構築)’の機能によって関係づけられていることを見た。

これらの結果から、「道順説明」の談話を分析するための枠組みを提示した。

第2章では、上述の参照点構築によって関係づけられた要素を元に、「道順説明」の中で繰り返される談話構造を検討し、加えて、その基本となる<参照点>がどのように概念化されるかの分析を試みた。

その結果、「道順説明」の談話には、参照点構築の機能を元にした「談話区間」と呼ぶべきまとまりを認めることができた。このような「談話区間」は、けっして任

意の地点で区切られて生じるものではなく、<参照点>の概念化に基づき、共通した特徴を持っていた。

第3章では、<参照点>を地点としてではなく、図形として指定している談話事例に焦点を当て、その概念化を図形認知の側面から検討した。加えて、それが「道順説明」における参照点構築にどのように反映されているかを検討した。

具体的には、まず本研究で実験材料とした地図が、認知心理学や知覚心理学等の領域で指摘されている「図・地反転」と呼ばれる現象の対象となっていることを明らかにした。その「図」と「地」の振り分けに基づくと、実験材料の地図上の白い図形部分（区域）が「図」として捉えられる場合と、逆に地図上の黒い線の部分（道筋）が「図」として捉えられる場合が区別できた。本研究では、前者の表現を「区域（districts）基盤型の『道順説明』」、後者の表現を「経路（paths）基盤型の『道順説明』」と呼んだ。

次に、前者の区域基盤型の「道順説明」に焦点を絞り、その参照点構築の過程を検討した。その結果、同過程は区域をたどる「鎖状所格の構築」関係を原型としながらも、指定された区域の内側にその一部を指定する参照点構築の関係を内包する構造を成していることが明らかになった。

第4章では、空間参照枠のモデルと空間描写の枠組みを元に、「道順説明」の談話において、空間が説明者によってどのように概念化され、それが被説明者との間でどのような言語形式で伝達されているかを検討した。

その結果、空間参照枠は「相対参照枠」か「固有参照枠」のいずれかに基づいていることが明らかとなった。特に相対参照枠に基づく場合には、3種の表現形式、すなわち 1) 地図上に記された記号（A～E）を方位とした表現形式、2) 慣習的に地図の上方を北として「東西南北」を定めた表現形式、3) 地図上の記号 A を上方として「上下左右」を定めた表現形式、が用いられていた。固有参照枠に基づく場合には、説明者の身体を中心として「前後左右」を定めた表現形式が用いられていた。

また、このような空間参照枠およびその表現形式は、必ずしも説明者の側から一方的に定められる場合ばかりではなく、被説明者からの働きかけに影響を受ける場合もあり、相互作用の過程において被験者間での合意として定められている実態が観察された。さらに、そこで定められた空間参照枠とその表現形式は、役割を交替して行う「単純な道順(緑)」においても、そのまま用いられる傾向が強かったが、場合によっては変更されている例も見られた。

◇ 第Ⅱ部

第Ⅱ部（第5章～第6章）では、第Ⅰ部で見てきた「母語場面」の談話データに加え、日本語母語話者と非日本語母語話者が被験者ペアとなる場面（「接触場面Ⅰ」・「接触場面Ⅱ」）も分析対象とした。ここでは、「道順説明」における概念化のトラブルや、それに関わる相互作用の過程を明らかにするとともに、接触場面特有の問題の検討も試みた。ここでの談話データも、「単純な道順(赤)」と「単純な道順(緑)」を対象とした。

第5章では、3つの場面（母語場面、接触場面Ⅰ、接触場面Ⅱ）において、「単純な道順(赤)」と「単純な道順(緑)」でのコミュニケーション効率（課題達成時間）を明らかにした。そして、そのコミュニケーション効率を低める要因を探るべく、「道順説明」がうまく続けられなくなる状況（「トラブル」）に焦点を当てて談話分析を行った。その結果、次の3点が明らかになった。

- 1) 「単純な道順(赤)」と「単純な道順(緑)」における「道順説明」のコミュニケーション効率（課題達成時間）は、母語場面に比べて接触場面の方が低かった。また同じ接触場面においても、非日本語母語話者が説明者である場合には、日本語母語話者が説明者である場合よりも、その効率が低くなっていた。
- 2) トラブルの発生には、「道順説明」における概念化の問題、すなわち、「参照点の概念化に関する不一致」、「図形の概念化に関する不一致」、「空間の概念化に関する不一致」が要因として関わっていると考えられた。
- 3) トラブルの発生件数は、母語場面に比べて接触場面の方が多かった。またその要因の内訳についても、接触場面では「参照点の概念化に関する不一致」が多い傾向が見られた。

第6章では、参照点の概念化に関するトラブルが多発している原因を探るため、「単純な道順(赤)」と「単純な道順(緑)」の初期段階に焦点を絞り、参照点の概念化のプロセスを3つの場面において比較検討した。

具体的には、まず「単純な道順(赤)」と「単純な道順(緑)」の道筋上において、トラブルが生じる位置を確認した。その結果、「単純な道順(赤)」 「単純な道順(緑)」とともに、トラブルが多く生じる地点は各道順の初期段階の位置にあること、またその傾向は「単純な道順(赤)」の方が強いことが明らかになった。

これを踏まえた上で、まずは「単純な道順(赤)」の談話の初期段階に焦点を絞り、

上記3つの場面において、被験者ペアが参照点を概念化する過程で用いる言語表現、確認等による相互作用の実態を比較検討した。その結果は次の3点である。

- 1) 母語場面では、参照点の概念化が非常に一致していた。一方、参照点を数え上げる説明方法や、言い換えなどによる確認等のやり取りが多々観察され、これらの相互作用が参照点の概念化の一致に大きな役割を果たしていることが窺えた。
- 2) 接触場面Ⅰでは、被説明者（日本語母語話者）による参照点に関する積極的な確認や、それを契機とした相互作用が多く見られた。これらは説明者（非日本語母語話者）による説明を補う機能を果たし、結果としてトラブルの回避につながったと考えられた。その一方でトラブルに陥った被験者ペアでは、被説明者から確認等が適切に機能していない状況が観察された。
- 3) 接触場面Ⅱでは、説明者（日本語母語話者）による参照点の言及も、被説明者（非日本語母語話者）による参照点に関する確認も、ともに半数の被験者ペアで観察された。しかしトラブルが発生したペアでは、説明者・被説明者間での相互作用がうまく機能していない状況が観察された。

上記のように、概念化に関する相互作用がうまく機能していない様子は、「単純な道順(緑)」においても、初期段階で参照点に関するトラブルが生じた被験者ペアで観察された。

◇ 第Ⅲ部

第Ⅲ部（第7章～第8章）では、「トラブル」という現象により深く迫るため、意図的に実験材料の地図に仕掛け（環境的障害）を仕組み、必然的にすべての被験者ペアが「道順説明」を進められなくなるという状況の元で行われた「複雑な道順(青)」の談話データを用いて、その問題解決の談話構造と相互作用の過程を検討した。

第7章では、環境的障害から必然的にトラブルが生じる「複雑な道順(青)」の談話データにおいてくり返される基本的な談話構造を明らかにし、それを「道順説明」が持っている固有の談話連鎖の中に位置づけ、それらの関係性を検討した。ここで明らかになったことは、次の3点である。

- 1) 「複雑な道順(青)」での課題達成時間は、3つの場面（母語場面・接触場面Ⅰ・接触場面Ⅱ）いずれもばらつきがあるものの、それぞれある時間帯に集まる様子が観察された。また母語場面と接触場面Ⅰに比べ、接触場面Ⅱは長い時間を要していた。
- 2) トラブルが生じて解決に至るまでには、基本となる談話構造が何度か反復される

現象が見られる。この基本談話構造は、《トラブルの表面化》、《折衝》、《解決策提案》、《解決策実施》の段階からなる。

- 3) 「複雑な道順(青)」の談話の流れには、課題を遂行する連鎖（「課題遂行連鎖」）と、発生したトラブルを解決するための連鎖（「トラブル解決連鎖」）の二種類があり、それが交互にくり返される現象が生じている。「トラブル解決連鎖」は、《トラブルの表面化》、《折衝》、《解決策提案》から成る。《解決策実施》においては、「課題遂行連鎖」に移行する。

第8章では、環境的障害によってトラブルが生じる「複雑な道順(青)」において《解決策提案》と《解決策実施》の段階に注目し、a) 「道順説明」の早い段階で示される《解決策提案》とトラブルを反復した後に示されるその違い、b) 《折衝》段階で対象とされているやり取りの内容、およびc) 最終的に解決へと向かう《解決策提案》の内容とその提案者について検討した。明らかになったことは3点である。

- 1) 《解決策提案》には、「やり直し型」と「転換型」を区別できる。「やり直し型」の場合には、その前段階の《折衝》で原因（環境的傷害）が特定されず、基本的には再びトラブルに陥ることになる。一方の「転換型」の解決策は、「やり直し型」の解決策がくり返された後、《折衝》の積み重ねで自分たちのやり取りに確信を深めたり、あるいは、もうこれ以上同様のやり取りを重ねるのは無意味と判断された段階で、それを打開しようとして提案される。結果として、「転換型」の解決策は解決（課題達成）へとつながる可能性が高くなる。
- 2) 《解決策提案》の前に行われる《折衝》の段階では、参照点に関する事柄、図形に関する事柄、空間に関する事柄が、やり取りの主な対象になっていた。このような《折衝》は、たとえトラブルの原因解明に直接つながらなくても、確実なやり取りが交わされれば、説明者・被説明者の間で、自分たちの概念化や行為が間違っていないという確信を形成し、それを強化していくことができる。そのようなプロセスの積み重ねは、結果として、解決に向けての《解決策提案》の素地を形成すると考えられた。
- 3) 最終的に解決へと向かう《解決策提案》とその提案者について検討した結果、母語場面と・接触場面では多くの場合、被説明者がその役割を担っていた。他方、課題達成時間を長く要していた接触場面Ⅱでは、被説明者が果たした役割は、母語場面・接触場面Ⅰほど明確ではなく、多くの被験者ペアが何度もやり取りを重ねて規定通りに終着点への道順をたどることを試み続けていた。このような背景として、接触場面Ⅱでは、課題達成に向けて大きな役割を担うべき被説明者が、非日本語母

話し手であったことが影響したと考えられた。

◆本研究の意義

以上のように、本研究では、「道順説明」という言語コミュニケーションを分析対象として、社会的相互行為の談話分析と、認知言語学という2つの領域から、「談話」、「認知」、「相互作用」という問題の交点に迫ることを試みてきた。

本研究では、基本的には社会的相互行為の談話分析から出発し、エスノメソドロジーの視点からその相互行為の現象に内在する規則性を見だし、記述・分析することを目指してきた。「道順説明」の中でくり返し生じる基本談話構造や、トラブル解決の談話構造、それと談話連鎖との関わりなどは、まさにこの視点から明らかにした「談話」の規則性と言える。

それと同時に、本研究では、このような「道順説明」の談話の背後に存在する言語主体（説明者／被説明者）の概念化のプロセスにも迫ることを試みた。これは「談話」と「認知」の交点を探る試みと言える。Lakoff (1987: 267-268) は、我々のある種の経験として、概念形成以前の構造の存在を指摘していた (cf. 本稿の第1章1.1.1)。本研究で明らかにした「道順説明」における参照点の概念化や、図形の概念化、空間の概念化の問題は、まさに上記の、概念形成以前の経験構造に基づく問題と言える。これらの概念化は、決して言語主体から独立した固定的・静的な記号ではなく、主体が自分の置かれている世界を切り取り、解釈していくプロセスにおいて構築されていくものであり、可変的でダイナミックな性質を持っていた。

他方、概念化は、単に説明者のみの認知プロセスから構築されるばかりではなかった。相手となる被説明者も、独自の概念化を行っており、両者の概念化が一致するとは限らない。しかし説明者と被説明者の相互作用の過程においては、互いに影響を与え合い、一致／了解を模索して折衝し、調整し、発展させていくプロセスを見出すことができた。このような概念化に関する協働構築的な性質は、相互作用を含む談話をデータであったからこそ浮上した側面であり、従来の単文や書き言葉の分析では、見出すことができなかったものと言える。ここで明らかになったことは、まさに「認知」と「相互作用」の交点に位置づけられるものとする。

認知言語学の多くの研究は、談話や言語運用を研究対象としてまだ日が浅く、また、社会的相互行為の研究において認知の問題に正面から取り組む例は少ない。筆者自身、異なる領域の先行研究をたどりながら、試行錯誤の分析を重ねてきた。その中から浮かび上がってきたのが、「道順説明」を行うために必要とされる、参照点

の捉え方、図形認知、そして空間認知という3つの側面の概念化であった。Langacker (2008) は、その著書 ‘Cognitive Grammar’ の第IV部を ‘Frontiers (最前線)’ と題し、‘Discourse’ の領域として、言語構造の基盤や言語使用、相互作用、談話機能等を議論している。本研究で抽出した上記3つの側面は、まさにこれらの中心に位置づけられるものであり、かつ空間認知や図形認知などより広い領域をも取り込む守備範囲となっている。

他方、本研究で分析の対象とした「道順説明」は、課題達成実験という状況の下で収集された談話データであり、実際の日常会話とは状況が異なる。しかし、この実験は、同じ条件下での談話のやり取りの収録と分析を可能にし、特に、同じ原因（環境的障害）から生じるトラブルでの談話を複数まとめて収集することができた。また、実験場面とは言え、当実験の被験者たちがトラブルに直面して困惑し、試行錯誤しながら交したやり取りは、決して不自然な談話ではなく、まさにその場で実際に生じている談話、言語コミュニケーションそのものであった。このような談話データは、実際の日常会話場面では非常に収集が難しいだけに、独自の談話資料としての価値を持つと言えよう。

◆今後の課題

本研究で談話データとした「道順説明」は、認知言語学的にも、相互行為分析の視点からも、また日本語教育への応用という視点からも、非常に興味深い現象を含んだ魅力的なデータである。この談話データを対象とした今後の研究課題として、以下の4点を挙げる。

- a) 「単純な道順(緑)」特有の談話特性の解明。
- b) 同じ被験者ペアによる、「単純な道順(赤)」、「単純な道順(緑)」、「複雑な道順(青)」における時系列的な相互作用の変化と、トラブル発生有無との関係の解明。
- c) 接触場面Ⅰ（非日本語母語話者が説明者×日本語母語話者が被説明者）と、接触場面Ⅱ（日本語母語話者が説明者×非日本語母語話者が被説明者）の違いの解明。
- d) 非日本語母語話者の日本語習得レベルが初級の場合の、概念化のプロセスの解明。

以上